

中国人から見た日本語の発想と表現 II

—「割る」と「割れる」という表現について—

Japanese Ways of Thought and Expression

From a Chinese Point of View II

—On Japanese Words “Waru” and “Wareru”—

任 佳 韞[†]

Ren Jiayun

Abstract This paper deals with Japanese ways of thought and expression, and how they are seen from a Chinese point of view. Especially Japanese words “waru” and “wareru” are discussed in this paper. Two examples of dialogues between a teacher and a student, which are in the same situation, and show the characteristics of Chinese and Japanese very well, are given. An intransitive verb “wareru” used by the student in the Chinese dialogue shows the student’s irresponsibility and a transitive verb used by the student in the Japanese dialogue shows the student’s sense of responsibility. The discussion shows the Chinese language is objective and the Japanese language is subjective, and such characters of the Japanese language and the Chinese language have to be taken into consideration when Chinese students study the Japanese language, and communicate with Japanese people.

1. はじめに

中国人が日本語を学ぶ場合に、難しいのが自動詞と他動詞の使い方である。中国人から見た、日本人の日本語の自動詞と他動詞の使い方には理解しにくいところがある。その代表的な表現が、日本語の「～になる」という表現である。この表現は、中国語には見当たらない。日本人、そして日本語独特の表現である。中国人にとって、特に理解しにくいのは、自分の意志で行なう、意識的行為であるにもかかわらず、「自然にそうなった」という表現が好まれるということである。しかもそこで、発話者、行為者、動作主は、その状況の被害者であるという表現を日本人は好むのである。

日本人は、自分で行いながら、発話しながら、「やむをえずそうなった」と言うのであるが、これは無責任

[†] 東南大学（南京市）

ということに通じはしないか。本稿で考えたいのは、そのことである。「～になる」という表現は、自分の意志を伴った意識的行為を、自分を越えた、もしくは自分が一体化した自然による行為のように表現したが、表現によっては、無責任と思われる表現となるのではないか。その一つの表現として、「割れる」という表現がある。まず「割れる」という自動詞と「割る」という他動詞について考えてみたい。

2. 「コップが割れた」と「コップを割った」

「割れる」と「割る」についての、日本人の発想と表現、そして中国人の発想と表現を、次の例で考えてみたい。

学生：哎呀！ (学生：あっ！)
老师：怎么了？ (先生：どうしたの？)
学生：杯子碎了。 (学生：コップが割れたんです)
老师：打碎了没关系，没受伤吧？ (先生：割ってしまったの、かまわないけど、怪我はなかった？)
学生：没有，手一滑就掉地上了，对不起。
(学生：はい、手が滑って落ちてしまいました、すみません。)

初めてこの会話を耳にした日本人は、おそらく違和感を覚えるであろう。「杯子碎了」(コップが割れたんです)という自動詞で表現すると、いかにも自分に何の関係も責任もないような感じを受けてしまうのではないだろうか。「手一滑就掉地上了」(手が滑って落ちてしまいました)についても同様のことが言える。

しかし先生の言葉「打碎了没关系」(割ってしまったの、かまわないけど)では、他動詞が使われ、いかにも学生の過失を責めているかのような言い方にとれやすく、初めて聞いた日本人が違和感を感じるのも無理はないであろう。

中国人の場合、以上のような会話は、いずれも自然な表現として受け止められる。この表現によって、コップを割った学生が責任を感じていないわけでもなく、コップを割られた先生も学生を責めているわけでもない。そこには、事実があるばかりで、事実を述べるのに、自動詞的表現と他動詞的表現を使ったということなのである。

先の中国人の会話を自然な日本語に直すと次のようになるであろう。

学生：あっ！
先生：どうしたの？
学生：コップを割ってしまいました。
先生：割れてしまったの。かまわないけど、怪我はなかった？
学生：はい、手をすべらせて落としてしまいました。すみません。
学生は他動詞「割る」を使って、「割ってしまいました」

と言い、そこに自分に責任があることが感じられる。先生は自動詞「割れる」を使用して、「割れてしまったの」と言い、学生の責任を問おうとはしていない。このような場面での日本人の常識的な反応としては、これが自然な反応と言えるであろう。最初から自分に責任のない自動詞で表現することは常識的にはこの場面にふさわしくない。

なぜ、ふさわしくないのでしょうか。日本人は「～になる」を使用する場合、その行為を自然のなりゆきの一部と解釈したい傾向がある。そしてそこで、受身の発想が生じる。ならば、ここでも、受身として自動詞表現ではいけないのであろうか。

「自然のなりゆき」という場合、そこには、「自然の営み」というような、自分の力を越えた要素がいる。だから自動詞を使う。そのような自分を越えた事象のなかでは、自分自身に関しては受身的態度がふさわしい。しかし事象が自分のコントロールが及ぶものである場合、自動詞を使うと無責任という一面をもつようになる。

中川正之は、日本語は「対象が自らの意思をもっていか否かによって動詞の形を変えている」として、「村民埋葬了死者」と「埋没他的才能」という例をあげている。¹⁾ 日本語では、「死者を埋葬する」とは言えるが、「才能を埋没する」とは言えない。死者はコントロールできるが、人の才能は他者によってコントロールできないので、他動詞は使えないというのである。これにならって言えば、コップはコントロールできるものである。だから、他動詞を使って「コップを割る」が自然であると言える。そこに自動詞が使われると不自然なことになる。支配できるものを支配していないということになる。そこで、責任が問われるのである。

ところで、先の日本語の会話で先生は自動詞を使って「コップが割れた」と言っている。この場合、他動詞の「割る」を使った場合、学生の失態を指摘することを含意しかねない。そこで、自然の事象であるかのように自動詞を使用したのである。

このように、日本語は自動詞、他動詞の選び方次第で同じ事実関係に微妙な違いが生じてくる。聞き手などに対する話し手の配慮が込められていることが多い。このことは日本語が、情意的、主観的な言語であることを物語っているのではないだろうか。

日本人の場合、話者、行為者、動作主等、その場の表現者は、自分との関わりのなかで、自分にひきつけて、情緒的に受け止めて、事象を表現するのを好む。

有名な小説『雪国』の冒頭がそれを示してくれる。

国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。

トンネルを抜けるのは汽車であり、サイデンステッカーはそう英語に訳している。

The train came out of the long tunnel into the snow country. (Snow Country)

しかし森田良行が説明するように²⁾、川端康成が表現するのは、「車窓を眺める私自身が、国境の長いトンネルの闇を抜けた。と、その瞬間、私の目に飛び込んできたのは、雪国であったよ」ということである。作者個人の目が事象に付随しているのである。

そのことが、このコップが割れた事象についての表現の場合についても、考えられるのではないだろうか。事象に、常に当事者個人が付随しているのである。そう日本人は受け止めている。コップが割れたことに、当事者がどう関わっているか、どう事象を受け止めているか、感じているか、日本人は敏感に感じ取ろうとしているのである。その一つの表現として、「割れる」と「割る」という表現がある。

コップを割った学生が「割れた」と、自然現象のように、自分が関係していないかのように言えば、無責任と感じ、先生が「割ったのか」と言えば、この先生は学生を責めていると感じ取る。それが、日本人の発想であり、その発想で表現された日本語は、情緒的で、主観的なのである。事象をそのまま客観的に表現するのではなく、その事象に関わる当事者の心理を付随させた表現となり、日本人の聞き手は、その表現に話し手の心理、感情を感じ取ろうとするのである。

そうした日本人の日本語に対して、中国語は客観的で、論理的であると言えるだろう。中国人は、自分を取り巻く環境の中で起こっている客観的事実、またはある原因によって起こされた出来事の状態をドライに受け止めて、自己とあまり結びつけずに、客観的に割り切った態度で表現する傾向がある。

先にあげた中国語の会話の中では「杯子碎了」(コップが割れた)も「手一滑就掉地上了」(手が滑って落ちてしまった)も、話し手が眼前に展開する現象と結果にだけ目を向けて、客観的に淡々と述べる態度しかとってないように見える。コップが割れたことを自己の行為の結果としてとらえていないため、日本語の視点から考えると、責任逃れと受け止められても仕方がないが、中国人に聞かせると、それほど違和感を感じないのである。

勿論、上のような場合、中国語に他動詞的表現がないわけではない。動詞としての他動詞的表現はないが、「把～了」(～をどうした)文形を用いることができる。「～」のところに願望に反する動詞を使用することによって、失敗の念、責任意識などの意を表すことができる。したがって、「我把杯子打碎了」(私はコップを割ってしまった)を使うと、日本語の「コップを割ってしまった」と同じ意味の文となる。

ただし、これは第三者が居合わせた場合、自分以外の人間が疑ったりされないために、「この私が割ったんだ」と謝るというより、「他の人と関係ないんだよ」と断っておくというニュアンスが強い。したがって、第三者がいない場合、別に言わなくても自分がやったのだと相手はすぐ分かるわけだから、「どうしたの」と聞かれると、事実だけを述べればいい。後に、「私の不注意でこんなことになって、すみません」というような言葉を付け加えて言えば、完璧である。

しかし日本人を相手にする場合、最初から「コップが割れたんです」と一言発したら、後でどんな言葉言っても、相手に不愉快な思いをさせてしまった事実は変えることができない。中国人の日本語学習者が日本人と会話する際、そういう日本語の自動詞、他動詞の使用の違いが理解できないことから、中国語表現をそのまま翻訳した形で日本語表現をしたために、コミュニケーションに支障を引き起こす例は少なくない。

実際、先の会話で、「我把杯子打碎了」(私はコップを割ってしまいました)よりも強い自責の念を表わす言い方が中国語には存在するのである。それは「被(辻)～」(～によって～られる)という受身形の表現である。「杯子被我打碎了」(コップは私によって割られた)のように受身の形をとることによって、失敗、自責の念がより強くなるのである。しかし日本語では、「コップは私によって割られた」という文は、不自然な日本語として使われない。中国語が受身表現を日本語の他動詞が表わす責任意識や失敗の念などの表出に用いるというこの点では、日本語と大きく異なっていると言えよう。

中国人にとっては、「コップが割れた」と言う表現も、「コップを割ってしまった」という表現も、一つの事象についての表現である。考えてみれば、先の会話で、「コップを割った」という表現がされても、割ろうとして割ったのではない場合がほとんどであろう。「割る」と言っても、本人の意志を伴う意識的行為ではなく、結果として割ってしまった、非意識的行為だから、「割れた」

という表現になったとも言えるのである。この場合、自動詞と他動詞、両者の意味するものは、一致していると考えてもよいであろう。自責の念は、別の表現をさらに付け加えて表現することになるだろう。

しかしながら、自動詞文に対し、他動詞文には、自分の不注意、過失から招いた結果で、失敗の念、自責の念、残念の気持ちがつきまとうといえることは否定できないであろう。そのあたりのことを、別の例で考えてみよう。

3. 自動詞と他動詞と自責の念

次のような例がある。

① A 私は宿題をためてしまったので、どこへも行けない。

B 私は宿題がたまったので、どこへも行けない。

② A 私は転んで骨を折った。

B 私は転んで骨が折れた。

①も②も、BよりAの方が、失敗、自責、後悔の念が強いと考えられる。①では、Aは主に主体の「私」に重点を置き、Bは「宿題」のところに重点を置く。②では、Aは主に主体の「私」に重点を置き、Bは「転んで」に重点を置く。しかしこれらを中国語に訳すと、AとBとでは、さほどの相違は現れない。

日本語では、同じ動詞で自動詞と他動詞の両方になる場合がある。そういう場合、行為者の意志よりも事態の結果に注目して表現する時には、自動詞が、行為者の動作や意志などに視点を置く時には、他動詞が選ばれる傾向がある。その結果、自分が相手のために何かよいことをした時には自動詞文を、自分が相手に対してよくないことを伝えたり、自分自身と結びつけて責任を感じた時には、他動詞文を使う傾向がある。

4. 「熱が出る」と「熱を出す」

次の二つの文を比較してみよう。

③ A うちの子は熱を出して、学校に行けない。

B うちの子は熱が出て、学校に行けない。

この場合、場面と相手との関係を考慮した上で、一歩下がった姿勢をとり、「うちの子は熱を出して、申し訳ありません」という気持ちを表わす。「学校に行けない」という結果によって、相手に迷惑をかける行為だと意識し

て他動詞文を用いるに至ったという心理状態を表わしている。この場合、「うちの子は熱が出て、行けない」というと、責任は完全に「熱」にあると言い訳調に聞こえる。

この例を中国語に直すと、「我家孩子发烧、不能去学校了」となる。一見、「熱を出す」という他動詞的表現を使っているように見えるものの、これはただ形式における偶然だけで、本当は「熱が出る」に近い意味なのである。当然、日本語の「熱を出す」という表現に見える心理は、毛頭含意していない。

④ A お茶が入っています。

B お茶を入れました。

この場合、Aでは、相手のためにしたことを、「好意の押し付け」という誤解を与えないように、他動詞「入れる」を使うべきところに、自動詞「入る」を使うのである。

中国語では、「茶沏好了」(お茶が入っています)と言うのもいいが、相手のためにお茶を入れたのだから、「我把茶给您沏好了」(私はあなたのためにお茶を入れました)と言う。このような表現は、押しつけがましいどころか、相手に対する敬意のようなものさえ、感じられるので好まれる。

このように、自動詞か他動詞を選択することは、聞き手や個々の場面に応じて、意図によって使い分けるといふ傾向が見られる。日本語は、情意的、主観的な言語なのである。

一方、中国人は、日本人ほど当事者と状況との関係を繊細に、敏感に意識することはないので、自動詞的表現と他動詞的表現に過敏にならず、事態を客観的にまず理解しようとする。

5. おわりに

中国語と日本語の自動詞と他動詞をとりあげて、両者の発想の違いを述べてきた。両者には、共通する部分はあるが、異なる点の方が多い。中国語の他動詞的表現が日本語では自動詞になったり、日本語の他動詞が中国語の自動詞的表現になったりすることが少なくない。中国人の日本語学習者にとって、日本語の自動詞と他動詞を習うにあたって、動詞自身の意味だけでなく、場面や対人関係についての日本人の繊細で、敏感な、主観的態度を考慮に入れておく必要がある。それは、日本語の性格を

理解するうえでも大事なことである。

本稿は作成から完成するまで森豪先生から多大なご指導をいただいた。改めて感謝の意を表したい。

註

- 1) 中川正行：漢語から見える世界と世間，pp. 132－134，岩波書店，東京，2005.
- 2) 森田良行：日本人の発想、日本語の表現，p. 15，中央公論社，東京，1998.

参考文献

- 佐藤琢三，自動詞と他動詞の意味論，笠間書院，東京，2005.
- 森田良行：日本語文法の発想，ひつじ書房，東京，2002.
- 池上嘉彦：「する」と「なる」の言語学，和泉書院，大阪，1997.
- 村木新次郎：日本語動詞の諸相，ひつじ書房，東京，1996.
- Yasunari Kawabata, Snow Country, Charles E. Tuttle Company, Tokyo, 1984

(受理 平成 19 年 3 月 19 日)